格非　「迷い舟」　桑島道夫訳
余華　「アクシデント」　飯塚容訳
高行健　「逃亡」　瀬戸宏訳
韓少功　「爸爸爸（パーパーパー）」　加藤三由紀訳
李昂　「さらば故郷（ふるさと）・西蓮・水麗」　藤井省三訳

その後、莫言『酒国』、李昂『夫殺し』という長編・中編の小説を読んだが、本誌での紹介に際しては、平凡社ライブラリー版所収の短編小説を常連ゼミ生六名が一篇ずつ選び、感想文への書き込みや座長司会による討論を参考にして、一人二〇〇〇字前後のレポートを書き直している。

いずれも豊かな感性と鋭い理性とを示す佳作であると私は考えているが、あるいは私もゼミの一メンバーとして討論に加わるうちに、ゼミ生諸君の情念と論理に取り込まれてしまい、批判すべき点、未熟な部分を見落としているかも知れない。本誌読者のご示教を乞う次第である。なお各ゼミ生の所属学年は九九年度現在のものである。（藤井省三）

「お下げ髪」論

文学部日本語日本文学科三年
中村　ともえ

生々しく過剰な存在感を放ち、しかも極めて寓意的な印象を与える「一メートル以上もある漆黒のお下げ髪」。本論では、題名にもなっているこのお下げ髪が、小説中どのような意味を担っているのか、素描することを目的とする。

髪は、それ自体としてまずエロティックなイメージを持つ（「濃厚な香りが鼻腔を刺激する」）。加えてこの小説では、お下げ髪を巡り様々に性に関する言説が語られていく。例えばそれは、醜い妻が夫を繋ぎとめるために頼る、彼

女の女性としての魅力である。夫は子供が生まれ家事に追われる妻に髪を切ることを勧める。「嬌ちゃんがいるんだ。君が坊主になったって、逃げられやしないよ。」と言って。しかしそれを契機に妻は狂気に陥り、「わたしのお下げがある限り、逃げようたってそうは行かないのよ！」と繰り返す。これは新婚の夜、彼女が「お下げ髪で彼の首を巻き、彼の耳たぶを噛みながら」言った言葉でもあった。最も性的な場面で語られたこの言葉は、夫を性愛で絡みとろうとする妻のイメージを喚起する。しかも単なる比喩でなく、お下げは実際に性行為に参加する。妻は夫の首にそれを巻き付け、またそれで彼を打つ。夫が「娘さんに鞭でやさしく背を叩いて欲しい」と民謡を歌い、友人が「おい、お前さんが叩かれたいのは鞭なのかね、お下げかね。」とからかう場面もある。お下げのこのSM的イメージは、SMがどうと言うより、単に性的であることを意味すると考えていいだろう。また夫の不倫相手でやはり長いお下げを持つ余は、自らそれを鋏で切り落とし、「わたしはあなたのためにお下げだって切ったのよ。どうしたってあなたのものなのよ。」と泣き迫る。お下げを捧げることは、自らを性的なものとして男性に差し出すことと同義なのである。

以上から、お下げ髪は女性自身と置き換え可能である。夫は友人に妻から余に乗り換えることを、「お下げを取り替えてみんか？」という言い方で勧められる。妻や余は男性から「お下げ髪」という言葉で、つまりまさしく女性であること、男性にとっての性的なものであるという形で、表象されてしまうのである。

さて、しかしここからがこの小説の特異な点である。妻も余もお下げを一本に結うが、「お下げ髪」という言葉で私たちが思い浮かべるのは、二本の三つ編みを下げた女性である。だがそもそもこの言葉は、男性のものである弁髪と女性のお下げ髪の両方を表す中国語、「辮子」の訳である。弁髪は日本の丁髷同様、かつての男性の男性としての象徴であり、男根の置き換えである。「辮子」と呼ばれしかも弁髪と同じ形態を持つ妻たちのお下げには、明らかに男根のイメージが貼り付いている。思い返せば、「一メートル以上もある」、「太く漆黒に輝き」などの形容も、女性的というよりは余りに男性的、それも露骨に男根への連想を促すものだった。

ここで小説の末尾に目を転じよう。小説の時間は、余がお下げを切り落とした直後一旦冒頭に戻り、とんで末尾の場面がこれに続く。冒頭で夫は「膝に一メートル以上もある漆黒のお下げ髪を載せ、苦しそうな表情で」林の中に座っている。末尾で彼は狂気の妻の待つ家に帰り、お下げを振り回し義母を追い払い、首に余のお下げをかけ、妻の顔を足で踏み付け「糞ったれ！」と言うと、包丁で妻のお下げを切り落としてしまう。お下げ髪の妻に束縛され自らは弁髪を持たないこの夫は、不倫によって男根を奪回し、暴力的に妻の男根を切り落とす。男根は正しい持ち主に帰った、一家に男は一人でいいのだ。——しかしこの結末は、輝かしい男根奪回の物語を破綻させてしまう。なぜと言って、男根を奪回し男性らしくなったはずの夫は、ここにおいて二本目の男根（！）を手に入れてしまうのだから。男根奪回が目的ならば、既に冒頭でそれは果たされていた。しかし小説はまさにその地点から書き始められ、末尾に至って彼は二本目のお下げを手にするのだ。男根は単数でなければならない。過剰な男性性は、逆に男性性を喪失させる。お下げを切り落とした夫はへたり込み、逆に妻は正気を取り戻し上半身を起こし文句を言う。末尾の二人の対照的な身振りがこのことを暗示するだろう。

「お下げ髪」は、性を巡る男と女の滑稽で愚かしい戦いのただ中にある。それを獲った方が相手を性的に支配できると彼らは考える。しかし見て来たように、どちらかが勝ちどちらかが負けるしかないこの戦いの最中には、幸せは、少なくとも「人呼んでこれを幸福という」というような状態は、訪れないのである。